

研究報告  
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡  
—上迫忠夫 選手—

大河原 裕 迪 (総合スポーツ科学研究センター)  
波多腰 克 晃 (スポーツ文化学部/体育スポーツ科学系)  
神 田 俊 平 (スポーツ文化・社会科学系)  
富 田 幸 祐 (オリンピックスポーツ文化研究所)

生年月日：1921 (大正 10) 年 10 月 14 日 (生) ~ 1986 年 (昭和 61 年) 10 月 20 日 (没)  
出身：島根県浜田市  
競技：体操競技

【経歴】

1940 年 島根県立浜田中学校 (現島根県立浜田高等学校) 卒業  
1942 年 日本体育専門学校 (現日本体育大学) 卒業  
1942 年 日本体育大学助手  
1947 年 松江市立家政高等女学校教諭  
1949 年 島根県立浜田水産高校教諭  
1950 年 本郷高等学校教諭  
1952 年 私立開成学園高校教諭

【競技歴】

1938 年 全日本中等学校選手権：優勝  
1942 年 東亜大会：個人総合 2 位  
1950 年 日米対抗日本代表選手  
1952 年 ヘルシンキオリンピック：種目別徒手/銀, 種目別跳馬/銅, 団体 5 位  
1953 年 日米対抗日本代表選手

本稿は「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した調査をもとに構成されている。本調査は出身地である島根県浜田市にて 2018 年 1 月 22 日, 23 日に行った。

本調査では、浜田市教育委員会を初め、浜田市立中央図書館、島根県立体育館 (竹本正男アリーナ)、浜田市浜田郷土資料館、島根県立浜田高校の方々に快くご協力いただきました。とくに資料の情報のみならず多方面にわたりご協力いただいた木原圭司氏に厚くお礼申し上げます

## 1. 競技との出会い

上迫忠夫氏は、1921（大正10）年10月14日、現在の鳥根県浜田市に生まれた。小さい頃、両親が仕事に出ており、毎日ふろの水汲みをしてそれが終わると友人と遊びに出かけていたという<sup>1)</sup>。上迫氏と体操との出会いは中学校のときである。1935（昭和10）年に鳥根県立浜田中学校（現鳥根県立浜田高等学校）に入学すると予期せぬ形で運動部への加入を決める。

私が浜中に入学して最初に入部したのはテニス部でした。入部したというより、入部させられたという方がいいのかも知れません。というのは、一年の最初の博物の時間に我々は校庭に集合しました。始業のベルがなると先生がラケット二本とボール二個を持って現れ、何だろうと不思議に思っているうちに授業が始まりました。名簿順に一人づつラケットを持たされ、先生と一対一で打合いました。何のことはないテニスの素質テストでした。博物の先生はテニス部の部長であったのです。一通りテストが終ると数名の者が呼び集められ（私もその中の一人でした）入部するよう命じられました。私としても特にこの運動がやりたいという希望もなかったので、さっそく入部して練習を始めることになりました<sup>2)</sup>

ひょんなことから上迫氏はテニス部に入部することとなった。ところが2か月ほど経過した6月のある日、体操部への転部を決意する。

昼休みに砂場で遊んでいた時、上級生が鉄棒で大車輪や宙返りをやるの見て度肝を抜かれました。もとより車輪や宙返りを見るのは生まれて初めてでした。テニスも二ヶ月を経過し興味も出て来たところでしたが、車輪や宙返りの魅力には勝てませんでした。血がさわいだと言うか、これこそ俺のやるべき運動だと直感しました<sup>3)</sup>

こうして上迫氏は体操部への入部を決めた。この時、砂場で繰り広げられる「大車輪や宙返り」に度肝を抜かされていなかったら、上迫氏の人生はまた違ったものとなっていただろう。

なおこの時、度肝を抜かされた上級生の中には同じく日本体育大学出身で、ヘルシンキ（1952）・メルボルン（1956）・ローマ（1960）と3大会でメダルを獲得した竹本正男氏の姿があった<sup>4)</sup>。17年後、上迫氏と竹本氏は「鳥根が生んだ『体操兄弟』」として体操競技個人種目初のオリンピックのメダルを日本にもたらすことになる<sup>5)</sup>。

体操部に入部したものの、当初は蹴上りでさえすることができなかった上迫氏は、毎日昼休みにも練習し技術を習得していく。宙返りができるようになったときにはうれしくて夜も眠れないほどであったという<sup>6)</sup>。また屋外の砂場に建てられた鉄棒は、バーのにぎりも太く弾力も全くないものであったという。雨が降らない限り毎日練習が行われたこともあり手の皮はむけばなしで、そういう時は手に布切れをまいて練習を続けた<sup>7)</sup>。こうした日々の努力、そして先輩に当たる竹本氏からの指導を受けた上迫氏は浜田中学在学時代に以下のような戦績を残したのである<sup>8)</sup>。

1937（昭和12）年：浜田中学3年  
第五回鳥根県体操選手権大会個人の部（中学校男子）：2位

第七回全日本中等学校体操選手権大会団体：3位  
第七回全日本中等学校体操選手権大会個人：1位

1938（昭和13）年：浜田中学4年  
第六回鳥根県体操選手権大会個人の部（第一部）：1位

第八回全日本中等学校体操選手権大会団体（第一部）：1位

第八回全日本中等学校体操選手権大会個人の部：2位

第八回全日本中等学校体操選手権大会種目別跳箱：1位

第八回全日本中等学校体操選手権大会種目別マット：1位

1939（昭和14）年：浜田中学5年

第十回明治神宮国民体育大会（兼第九回全日本中等学校体操選手権大会）中等学校男子の部：2位  
第1回島根厚生大会中等学校男子一部（個人の部）：1位

## 2. 日体大での思い出（選手生活での思い出）

1940（昭和15）年3月に浜田中学を卒業すると、同年4月に日本体育専門学校（現日本体育大学）に入学した<sup>9)</sup>。学生時代のエピソードとして残るのは運動神経の良さを伝える記述である。バレー、バスケット、陸上、柔道となんでも万能だった上迫氏は、日本体育専門学校時代にはピンチヒッターとして他の部から引っ張りだことなっており、上迫氏は求められるたびに快く引き受けていたという<sup>10)</sup>。また在学中の1942（昭和17）年には東亜競技大会に出場し個人総合で2位となっている。

在学中の上迫氏に関する記述は、管見の限り上述した運動神経の良さを伝えるエピソード以外に確認することが出来ない。これには、わずか2年での繰上卒業とその後の出征が大きく影響している様に思われる。上迫氏は1942（昭和17）年9月には繰り上げ卒業となり、そのまま日体大の助手となっている。しかし、間もなく軍に応召となり浜田の歩兵第二十一連隊に入隊、現インドネシアのスラウェシ島（セレベス島）に派兵された<sup>11)</sup>。上迫氏は出征経験のあるオリンピック選手であった。

敗戦後、1946（昭和21）年に帰国した上迫氏は、日体大の助手を辞め故郷の島根県で教師になった。1950（昭和25）年には、日米対抗体操選手権大会の補欠に選ばれたが、先輩の竹本氏から「オリンピック出場を目標とするなら東京に出なければ…」といわれ当時すでに子どもも2人いたが上京を決意する。上京後は、本郷高校を経て私立開

成学園の教諭に就任し、同校に体操部を新設した。就任後間もなくオリンピックの体操日本代表を決める最終予選会が神奈川体育館で行われ、5位に入り代表の座を獲得した<sup>12)</sup>。

## 3. オリンピックでのメダル獲得

1952（昭和27）年7月19日～8月3日まで開催されたヘルシンキオリンピックは、戦後になって日本が初めて出場することのできた夏季オリンピックであった。独立回復間もない日本では日本政府が賠償問題に重点を置き外貨の使用抑制を図るため海外渡航者を極力抑えようとしていた。そのためヘルシンキへの選手団の派遣も大人数にすることは出来ず、入賞圏内の選手のみを派遣する「精鋭主義」を掲げて選考が行われた。これまでのオリンピックで目立った成績を上げていなかった体操は男子のみ5名の派遣となった。これは団体戦に登録できる最小人数であった。選考の結果選ばれたのは竹本正男、小野喬、金子明友、鍋谷鉄己、上迫忠夫の5名である。小野喬は1964年の東京オリンピックで日本選手団団長を務めた人物である。

この大会の団体戦は、1チーム8人制で競われ、チーム得点は各種目の8選手の演技得点のうち、よいもの5選手の得点を有効として計算する方式であった。そのため、5人ぎりぎりでは1人も失敗できない大きなハンデキャップだった。日本に体操で初めての銀メダルをもたらした徒手は、午後9時半から演技が始まった。金子選手、小野選手、鍋谷選手に続いて上迫氏の出番が来た。落ち着いておもむろに演技開始。『朝日新聞』は上迫氏の演技を次の様に伝える。

上迫が両足を開いて体をマットにつけると大変な拍手。この芸当は外人にはちょっとやれないので感嘆の拍手である。マットに体をべったりとつけるとワーッという歓声、こゝに見物に来ているのは体操に経験がある人ばかりで相当に目のこえ

た人が多い。ちょっとへたをするとすっかり拍手がなくなってしまう<sup>13)</sup>

上迫氏の得点は、合計 19.15 点。これはトップの選手の 19.25 点と差はわずか 0.1 点、金メダルにあと一步だったが、堂々の第 2 位だった。これが日本体操史上初のメダル獲得であった。跳馬でも第 3 位となり銅メダルを獲得。後にお家芸とまで言われる「体操ニッポン」の夜明けであった。

ヘルシンキオリンピック 徒手（種目別順位）			
	氏名	国名	得点
1	Thoresson	スウェーデン	19.25
2	上迫忠夫	日本	19.15
2	Jokiel	ポーランド	19.15
4	小野喬	日本	19.05
5	Laitinen	フィンランド	18.95
5	Lindh	スウェーデン	18.95

ヘルシンキオリンピック 跳馬（種目別順位）			
	氏名	国名	得点
1	Tchoukarine	ソビエト	19.2
2	竹本正男	日本	19.15
3	上迫忠夫	日本	19.10
3	小野喬	日本	19.10
5	Eugster	スイス	18.95

#### 4. その後の人生

上迫氏は競技を引退した後も開成学園で教鞭を執りながら日本体操界に貢献した。ローマオリンピックのコーチを初め、1962（昭和 37）年と 1966（昭和 41）年の世界選手権大会、1964（昭和 39）年の東京オリンピックでは国際審判員を務め、その後は、日本体操協会競技向上委員長、女子競技本部長、普及委員長、理事、日体スワロークラブ副会長等を歴任した。オリンピックで 2 つのメダルを獲得した上迫氏だが、そのことを自分

から生徒に言うことはなかったという。そのため、オリンピック当時の生徒はともかく何十年も経ってからの生徒はそのことを知らないほどであった。決して自慢をしない人だった。また、人の批判や悪口を決して言うことはなく、人がその様な話をしていると「そのくらいにせいや」と諷めていたと伝えられる<sup>14)</sup>。

#### 5. 上迫忠夫の言葉

上迫氏は出征を経験し敗戦後の社会情勢の中、オリンピック出場を果たし日本体操史に初のメダルをもたらした。戦争を乗り越えたメダリストであった。そして、長年教鞭を振るい生徒たちから好かれる教師でもあった。残念ながら専門学校（日体大）時代の記録を散見することはできなかったが、スポーツ万能で先生になることを目指し進学してきた上迫氏の姿は、いまでも多くの日体生と重なることだろう。

最後に上迫氏が教鞭を執っていた折に生徒に向けて語っていた言葉を後輩へのメッセージとしてここに記し結びとしたい<sup>15)</sup>。

「オリンピックや世界選手権における勝負は、相手に勝つことではなく、自分自身に勝つことである」

「結果は人が評価する。君に大切なのはその過程だ」

「温室育ちは弱く、雑草は強い。自ら温室に入るな。進んで野に出でよ」

#### 引用・参考文献

- 1) 浜田市教育委員会『浜田の人物ものがたり第一集』柏村印刷株式会社、1995年、p.66.
- 2) 上迫忠夫「中学時代の想いで」浜田高校体操競技部『浜高体操部五十年の歩み』1983年、p.21.
- 3) 同上書、pp.21-22.
- 4) 同上書、p.21.

- 5) 「でかした竹本・上迫両選手」『朝日新聞』  
1952年7月22日夕刊3面.
- 6) 前掲書2, p.22.
- 7) 同上書, p.22.
- 8) 同上書, pp.96-97.
- 9) 山崎克彦『浜田市政五十周年記念：子供のため  
の浜田人物ものがたり』郷土文化を育てる  
会, 1990年, p.74.
- 10) 同上
- 11) 「体操に情熱を注いだ人 上迫忠夫」浜田市教  
育委員会『浜田市の人物読本 ふるさとの50  
人』2016年, 18頁.
- 12) 前掲書9, pp.74-75.
- 13) 「体操で日の丸三本」『朝日新聞』1952年7月  
22日夕刊1面.
- 14) 前掲書9, p.77.
- 15) 同上書, p.78.

